九州産業大学大学院

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL

令和2年度 研究成果発表会

版表現についての研究 素材を活かした作品づくり

博士前期課程

芸術研究科 造形表現専攻 美術領域

於保彩花



主査 古本元治 副査 渡邊雄二 塚本洋守

研究背景

これまでに版表現を行う中で様々な素材とふれあってきた。

なかでも木と紙の質感を気に入り、素材を生かした作品づくりを行うようになった。層のように漉き重ねて作られる紙と、木に見られる木目の風合い。

この2つの素材に共通する「重なり」は、日々私の中に蓄積されて行く 記憶と似ており、柔らかな質感は目には見えない漂う思いをかたちにする 手助けをしてくれるように感じ、素材にこだわった制作を行うようになっ た。

研究目的

木と紙の質感を活かした表現を行いたいと思い、ベニヤ板を版とする木版リトグラフという平版の技法を用いた。この技法により、木目を見せることが可能になり、筆あとを活かす表現もできる。

その技法で2点制作している。支持体に植物の繊維が目立つネパールの紙を使用した平面作品と、パルプを貼り合わせた半立体の張り子の作品である。張り子は日本に古くからあり、日本人に馴染みのある技法である。張り子と版画、さらに私の表現と合わせる事でどのような版表現が生まれるのか、という興味を持ち制作に到った。

研究概要







成果・まとめ

版・描き方・紙の種類・インクの粘度など様々な方法を試すことによって、自分の表現にあった方法を模索する機会となり、表現の広がりを感じた。

張り子の作品では、版画=平面という枠にとらわれず、版画を立体にも取り入れていくことで、平面には無かった空間との関係を考えることになり、新たな版表現と可能性を見つけるきっかけになることを実感した。これからも素材に注目し、活かしながら、表現したいことに合わせた素材の見せ方を探っていきたい。

指導教員コメント

学部から木版画・銅版画・リトグラフ・スクリーンプリントなど多様な版種に取り組み、木版リトグラフといった版種に独自の世界観を見出すことができた。

紙漉などの素材研究を通してハンドメイドのパルプや刷りには適さない ネパール紙などを積極的に挑戦した取り組みは評価できる。また伝統的な 張り子によるレリーフは、版画の枠を超え版表現の可能性を感じる。

企画展や銀座での個展など発表を積極的に行ってきたが、今後の作家活動の展開に期待したい。

古本元治